

“Songs of Innocence and Experience” 小論

宇佐美道雄

A SHORT PAPER ON “SONGS OF INNOCENCE AND EXPERIENCE”

MICHIO USAMI

In this short paper several aspects of Blake's "Songs of Innocence and Experience" are analysed, and Blake's situation as a romantic poet is examined. As for the characteristics in circumstances, theme, technique and thought of the work, the dual contradiction and its reconciliation are pointed out as a consistent tendency throughout them. It is concluded that this tendency can be seen not only in Blake but in all the poets of Romantic Movement, and that Blake is immature in his presentation of the tendency in his lyrical poetry.

詩人

英文学史のなかで、Blakeが占めている地点を、大まかに規定すれば、それは、エリザ朝文学への復帰、古典派文学への反逆、浪漫派文学への先駆、という三つの点に要約することができる。そして、エリザ朝文学への復帰と古典派文学への反逆という二つの点は、それ自体が、既に浪漫派文学の著しい特色の一部をなすものであるから、この場合は、浪漫派文学への先駆という点に焦点をしばって、Blakeの占めている地点を見究めていると思う。

イギリス浪漫派運動の中核をなす部分は、普通、WordsworthとColeridgeを代表とする前期浪漫派、及び、ShelleyとKeatsを代表とする後期浪漫派の二つから成ると考えられている。そしてBlakeは、多くの場合、この中核部からは除外して考察されるが、Blakeの詩が示した主なる諸傾向が、これら中核部をなす詩人たちの示した諸傾向と、概ね一致しているということに関しては、殆んど議論の余地がない。この場合、W. Raleighが、Blakeの作品のなから、丹念に拾いあげた次の諸例を引き合いにだしておけば、十分にことは足りる。

Youth delight, come hither,
And see the opening morn,
Image of truth new-born,
Doubt is fled, and clouds of reason,
Dark disputes and artful teasing.

という the Ancient Bard の声は、Wordsworth の praise of the revelations of sense と概ね一致しており、

The Sun's Light, when he unfolds it,

Depends on the Organ that beholds it.

というたった一つの couplet のなかには、Coleridge の ode の metaphysical idealism が凝縮されており、

Dear Child, I also by pleasant streams,
Have wander'd all Night in the Land of Dreams;
But tho' calm and warm the waters wide,
I could not get to the other side.

'Father, O father! what do we here
In this land of unbelief and fear?
The Land of Dreams is better far,
Above the light of Morning Star.'

のごとき二つの stanza は、そのまま "La Bell Dame sans Merci" の恍惚に通じており、そして、"French Revolution" や "America" に現われる king や priest のタイプは、そのまま Shelley の revolutionary theology を具象化したものに外ならない。

Blake の文学の諸傾向が、本質的に、イギリス浪漫派文学のそれと一致していることは、もはや疑いの余地がない。しかも彼が、浪漫派運動の中核から、いつも除外されるのは何故か。S.A. Brook は、'In this choice of homely subject, in this naturalness of emotion and expression, in this theme of the human heart, these songs [Songs of Innocence and Experience] are the prelude to the Lyrical Ballads,' といい、W. Raleigh は、'In these songs [Songs of Innocence and Experience] and in other unprinted poems Blake had anticipated the Romantic movement in all its phases. The most characteristic doctrines of the diverse sects of that great school are all

foreshadowed in stray lines of Blake's verse.' という。しかも、それ以上をいおうとは、決してしないのである。この引用に現われたかぎりでは、原因は、作品の書かれた時期の早い遅いだけに関係しているように思われる。しかしこの場合、作品の書かれた時期というものが、あまり重要な契機である筈はない。“Sons of Innocence and Experience”の出版されたのは、1794年であるにしても、Blakeが死んだのは1827年であり、しかも、詩は死ぬ2年まえまでは、殆んど絶えることなく書き続けられたのである。因みに、浪漫派運動のエポックを画する“Lyrical Ballads”が出版されたのは、1798年であり、後期浪漫派の主要な詩人たち、ShelleyやKeatsやByronが死んだのは、みなBlakeの死に先立つこと数年なのである。だいいち、18世紀の中葉、すべてに先駆けて浪漫的な傾向の詩を歌った詩人たちには、既に前衛浪漫派という名称が与えられているではないか。

一つの文学運動のなかでの、ある詩人ないしは作家の史的的位置付けに関しては、作品の書かれた時期についてばかりではなくて、その文学運動の本質的傾向が、その詩人のなかで、どれほど完全に成熟し切ったかという、その成熟の度合によっても、測られねばならない。もっとも、詩人のなかでの時代を画するような、ある大きな文学的傾向の成熟の度合というものは、大体において、詩人の運動に参与した時期の早い遅いに一致している筈のものである。それは、文学運動の展開の過程そのものが、詩人の個人的資質の差異を越えて、社会全体の歴史的展開の過程と揆を一にしているものであるからに外ならない。ところで、ことをBlakeにかぎっていえば、彼の浪漫派運動内での史的的位置付けに関して、その浪漫派的特質の成熟の度合が、無視されてしまうか、あるいは口をつぐまれてしまうかする場合が多い。それは、Blake研究家の多くが、彼の詩作の時期的に先駆けていたことのみを主張するに急で、その時期的尚早さに比例して、浪漫派的特質の成熟の度合において、彼が未成熟であったという事実は、あまり目を向けようとはしないという傾向に基因していると思われる。勿論、この種の断定が成り立つためには、Blakeのなかで未成熟のままに終つたとするその浪漫派的特質というものの内容が、厳密に検討されねばならないことはいうまでもない。しかし、この場合、その種の検討はすべて最後の章にゆずることにして、一応、浪漫派運動全体を、前期、中期、後期の三つの時期に区分して、Blakeの占める地点を、Burnsとともに、その前期に分類するという図式の成り立つことだけは、主張しておきたいと思う。そしてこの図式は、単に時期的なものだけから測定されたのではなくて、浪漫派運動に参与したすべての詩人に共通して、純粋にその文学的特質の成熟の度合のうえからも、正しく測定されたものであることを附記しておきたいと思う。

けだし、詩人の文学史的分類が、それ自体として重要な意味を持つことは、あまりあるまい。Blakeに関して、あえてそれを提示した所以は、イギリス浪漫派運動全体を一貫して流れている、ある文学的特質を抽出し、その特質がBlakeのなかで如何に成長したかを、一つの作品を目安として測定しようとするのが、この論文の主要なテーマの一部をなしているからに外ならない。

作 品

“Songs of Innocence”は1789年に完成され、“Songs of Experience”は1794年に完成された。年齢的にみると、これらのsongsは、30代の始まりから、30代の半ばにかけて書かれたということになる。そして、比較的波乱に乏しいBlakeの生涯のなかでは、特にこの時期のあいだには、詩人に大きな影響を与えたとされている事件が、かなり集中的に起っているように思われる。事実、その霊が絶えず詩人の側らにあつて、生涯彼と語り合つたと自らいっているあの愛弟Robertの死、詩人をして「妻のうちにあらまほしと願うものは、娼婦のうちに常に見出される一みたされし慾望の姿それなり。」とまで歌わせた妻Catherineの極度の禁慾主義、詩人がそのころ心から共鳴して交わっていた“Rights of Man”の著者Thomas Paineの逮捕等、Blakeの心に暗い影を投げかけた出来事は、すべてこのころ相次いで起つたものに外ならない。Blakeの生涯にはじめて襲いかかったと思われるこの苦悩の激しさは、そのころ健康的に最も恵まれており、しかも生活のうえでも一番安定していた筈のBlakeが、‘I say I shan't live for five years, and if I live one it will be a wonder.’ともらしたその言葉のなかにも、十分うかがうことができる。作品の成立と詩人の実人生との関連にあまりこだわることには、この場合、厳格に拒否されねばならないとしても、“Songs of Innocence and Experience”という作品に関しては、その示す特質と、その書かれた時期の、詩人の実人生との間に、見事な照応関係のみとめられることを否定するわけにはいかない。C.M. Bowraも次のようにいっている。‘At some date in these years the common world was revealed to him, and he found it more frightening than he had ever suspected. From this discovery the Songs were born.’

“Songs of Innocence and Experience”の書かれたころ、比較的平穏無事であったBlakeの精神生活のうえには、はじめて苦悩の激動が吹き込んできたごとく、ちょうどその時期には、Blakeの詩作のうえにも、全く相反する二つの傾向のものが、激しく入りまじって争っていた。そしてそれは、まず、二つの異ったジャンルの詩という形となって現われた—lyricとpropheticと。この二つのジャンルの詩が、その意図においても、手法においても、全く別種のものであるという事実に、更めて注

目される必要がある。Bowra は、最近の著書のなかで、prophetic book によって、Songs を説明しようとするものの危険にたいして、鋭い警告を発している。両者の相違は、

Piping down the Valleys wild,
Piping songs of pleasant glee,
On a cloud I saw a child,
And he laughing said to me :

"Pipe a song about a Lamb!"
So I piped with merry cheer.
"Piper, pipe that song again;"
So I piped : he wept to hear.

という "Songs of Innocence" の冒頭の数行、及び
Rouze up, O Young Men of the New Age! set
your foreheads against the ignorant Hirelings! For
we have Hirelings in the Camp, the Court and the
University, who would, if they could, for ever
depress Mental and prolong Corporeal War.

という "Milton" の冒頭の数行によって、まことに象徴的に示されている。再び Bowra の言葉を借りれば、Blake は一方において、traditional and lyrical art を追求したのであり、そして一方においては、Bible を補足し訂正するような神話を打ち立てようとしたのである。ところで、この二つのジャンルの詩の年代的な系譜を調べてみることは、"Songs of Innocence and Experience" という作品の位置を見定めるうえに、非常に役立つ。lyric の制作は、Blake がはじめて詩を書いた1768, 9年ごろに始まり、そして1794年ごろには大体終ってしまった。一方 prophetic の制作は、1788, 9年ごろに始まって、1822年ごろまで続いている。つまり Blake は、詩作の全過程の大体まえ半分を lyric に、あと半分を prophetic に費したことになるが、"Songs of Innocence and Experience" の制作は、ちょうど、prophetic の始まったところから、lyric の終わったところまでの時期に相当している。すなわちこの作品は、Blake の詩が、lyric に終りを告げ、prophetic に向おうとする変動のさなかに生れ出たものなのである。

lyric の系列のなかでの "Songs of Innocence and Experience" の内容的な特徴に関して、J.P.R. Wallis は、用語のうえで、従来著しかったエリザ朝文学への模倣が影をひそめて、Blake 独自の詩風が完成されたこと、及び、従来の詩にみられなかった ethical な面と mystical な面があらたに加わったこと、の二つの点を指摘している。つまりこれは、Blake の詩のなかに、倫理的及び神秘的指向があらたに目をさまし、それが他のどんな言葉でも現わすことのできない、新しい詩語を必要とするに至ったということの意味している。倫理的及び神秘的指向とは、すなわち、「如何に生くべきか」の問

題への指向に外ならないではないか。Blake は、そのとき、人生の途上に訪れる、切実な二律背反の問題に直面し、そしてそれを神秘的な思想のなかに統合しようと試みたのである。

1794年に出版された "Songs of Innocence and Experience" という作品の位置を、再びここに見定めてみれば、それは、実人生のうえでは、詩人の至福の生活のなかに苦悩がその影を宿しはじめたときに制作されたものであり、また詩作の系譜のうえからみれば、それは抒情詩が終りを告げて予言書が始まろうとしているところに位置しており、そして詩の内容のうえからいえば、それは如何に生くべきかにかかわる二律背反の問題が、詩人のなかに激しく渦巻きはじめたときに現われたもの、と要約することができるようである。

主 題

Blake は "Songs of Innocence and Experience" を書いている間、lyric と prophetic という二つの刀を同時に使い分けていたが、そのころの作品として、一方を代表するものが "Songs of Innocence and Experience" であり、他方を代表するものが "Marriage of Heaven and Hell" であるということには、誰も異論の余地があるまいと思われる。そしてこれら二つの作品の題名は、そのまま、この時期の Blake の作品の主要なるテーマが何であったかを、最も象徴的に物語っているように思われる。既に、詩人自身 "Songs of Innocence and Experience" の title page のなかで、作品の意図を 'showing the two contrary states of the human soul' と表明し、また "Marriage of Heaven and Hell" の argument のなかで、'Without contraries is no progression. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence.' と言明しているのではないか。"Songs of Innocence" の "Inroduction" が、

Piping down the valleys wild,
Piping songs of pleasant glee,
On a cloud I saw a child,
And he laughing said to me :

"Pipe a song about a Lamb!"
So I piped with merry cheer.
"Piper, pipe that song again;"
So I piped : he wept to hear.

という stanza に始まれば、"Songs of Experience" の "Introduction" は

Hear the voice of the Bard!
Who present, past, and future, sees;
Whose ears have heard

The Holy Word
That walk'd among the ancient trees,

Calling the lapsèd soul,
And weeping in the evening dew;
That might control
The starry pole,
And fallen light renew!

という stanza に始まる。そして全く同じようにして、一方で

Pretty Joy!
Sweet Joy, but two days old.
Sweet Joy I call thee :
Thou dost smile,
I sing the while,
Sweet Joy befall thee!

と歌われた“Infant Joy”は他方では、
My mother groan'd, my father wept,
Into the dangerous world I leapt;
Helpless, naked, piping loud,
Like a fiend hid in a cloud.

という“Infant Sorrow”に変る。

“Songs of Innocence”に描かれているものは、確かに子供の世界であり、そこに溢れているものは、確かに love と joy と imagination である。また一方、“Songs of Experience”に描かれているものは、確かに大人の世界であり、そこを満たしているものは、確かに hatred と sorrow と sense-perception である。だから、S.A. Brook が ‘In Songs of Innocence, we get the archetypes of good, and in Songs of Experience, we get the archetypes of evil.’ と述べているのは、それで正しい。しかし、ただここで注意したいことは、Blake の意図は、ものの二面を、つまり世界の実相を提示することによって、二つのものの価値判断を行おうとするにあるのではないということである。Blake は、しばしばその予言書のなかで、われわれの住んでいる世界を Beulah ないしは lower paradise と呼んで、それを天上界より劣り、地獄界より優れたものと規定する。すなわち、‘Innocence’ と ‘Experience’ に象徴されるすべての二元的対立は、ことごとく human world のなかに属するものであって、一方が天上にあり、他方が地獄にあるというようなものではないということなのである。両者の関係は、車の両輪のごとく、一方を俟ってはじめて他方が存在するという種類の、あくまで対等ないし相互依存的なそれであって、そこには未塵も価値判断は含まれてはいないのである。

“Songs of Innocence and Experience”という作品における主要なるテーマは、確かに、あらゆる存在の二律背反性、宇宙の不条理性、畢竟、この real world の

実相にたいする詩人の認識というものを表明してみせることにあった。しかし、認識そのものが、行為の原則となりうる筈はない。認識は、倫理的、審美的ないしは論理的形態を整えた思想にまで昇化することによって、はじめて行為の原則となりうる筈である。それでは、Blake は、この認識のなから、どこにその統一を求めたか。存在にたいする統一の見解を把握することができなかったから、Blake は抒情詩を捨てて予言詩に向った、という種類の図式を立てることは、この場合安易にすぎる。未だ思想と呼ぶことができるほど明確なものが表明されてはいないにしても、その方向だけは十分に暗示されているといつてよい筈である。J. Wicksteed が “Infant Joy” と “Blossom” に読み取ったもの、C. Raine が “Little Girl Lost” と “Little Girl Found” に読み取ったもの、それはともに Blake の認識における統一の把握の方向を指摘したものに外ならない、ということができるようである。“Songs of Innocence and Experience”の真の主題は、やはり、詩人の存在にたいする認識を表明すると同時に、認識の統一の把握の方向だけでも、抒情詩の形に歌いあげておこうとするところにあった、といえると思われるのである。

技 巧

“Songs of Innocence and Experience”という作品は、それぞれ独立した19篇及び26篇の短い抒情詩を含む二つの部分からなり、一つ一つの詩は、おのおの美しい絵とともに、作者とその妻によって、手ずから彩色を施され、印刷に附された。これらの抒情詩は、すべて詩型が短く、美しい絵のなかに文字が散りばめられているようにみえるから、一つ一つの詩自体が、その illustrate と一緒になって、一瞬のうちに捉えられた、すばらしく vivid な vision のごとき趣きを呈している。そして全篇に漲る vision の連続の美しさは、時として詩の調和を損うほど一方的な傾斜を示すことがあるにしても、英文学史のなかでもその比をみないものとして、しばしば絶讃の対象となっている。Blake の詩にみられるこの vision への傾斜の激しさというものは、確かに、Blake が持って生れてきた資質というようなものを想定することなしには、ちょっと説明のつかない種類のものではないかと思われる。S.A. Brook は、‘It is no wonder that he wrote songs. There were elements in his character which were the air and fire and dew of songs. He lived in a visionary world of his own in which all things rejoiced and sang.…… Indeed, the best explanation of Blake's songs is that he was always a child at heart; and it would not have mattered where he lived. The child, if he loved, knows neither time nor space.’のごとく述べて、Blake の songs の基因の重要な一面として、Blake が

生れつき vision に恵まれていたこと、また、彼が一生 涯子供のような単純さ、率直さを失わなかったことの二つの点を強張している。vision に恵まれているということは、子供の世界に共通する特権の一つであって、この両者は決して無縁なものではないのであろうが、Blake の伝記が記録しているように、Blake は、実際、4才のとき神が現われて彼の顔を窓に押しつけ、彼に叫び声を発せしめたという幻想を最初のものとして、実に多くの種々なる幻想の逸話を残している人物である。従って、“Songs of Innocence and Experience” の技巧的な特色の一つとして数えることのできる Vision の多用は、Blake が子供の世界にのみみられる、ある独特な資質において、人並みはずれて強烈であり、しかもそれを生涯 持続しつづけたということにあるといえるようである。

Blake の資質における childlikeness の激しさは、この作品のなかの vision の豊富さばかりではなくして、その用語と韻律の面でも、際立った特色をなしている。J. Wicksteed は、“Songs of Innocence and Experience” の vocabulary に関して、全語数は約5,000、使用語は約1,000、そのうち約80%は monosyllable よりなり、tri-syllable は60、tetra-syllable に至っては、全篇にわずかに5を数えるのみ、と指摘している。ここにみられる単語は、その殆んど全部が単純明快なものばかりで、“Poetical Sketches” の時代にみられた模倣が影をひそめて、Blake 独自の詩風が確立されてきたという事実は、ここにも十分うかがうことができる。rhyme の特徴に関していえば、(bowers, flowers) (boys, joys) (mothers, brothers) (beams, streams) というような、幼稚でどぎつい rhyme が繰返えし繰返えし使用され、mistaken rhyme, imperfect rhyme, repeated rhyme, のごとき bad rhyme がしばしば顔をのぞかせている。alliteration, assonance, consonance を含めて、洗練された韻の美妙さというようなものは、全くうかがうことができない。また、これらの詩のあるものは、典型的な詩形に則って歌われているが、一方、scan することの全く困難な、不思議な rhythm をもって歌われているものも多い。因みに W. Raleigh は ‘It seems that he sang his own lyrics to tunes of his own choice, and shaped them by that loose prosody which music supplies.’ といって、Blake の詩の制作が、即興的な melody と深く結びついていたことを示唆しているが、vision が言葉や絵画や音楽を伴って、それらと一体になっているということは、やはり子供の世界に通有の現象の一つであって、ここにも Blake の詩の世界の独自性が顔をのぞかせているということができる。このほか、‘The Sun does arise’, ‘Old John does laugh’, ‘Cock does crow’ のごとき強勢の do の頻繁な使用、意識的と思われるどぎつい文法上の誤り、capital, archaic を効果的に配した spelling の特異な手法、

“Holy Thursday” のごとく全く省かれているものまで含めて punctuation の自由奔放な使用等々、これらの詩を彩る著しい特色は、すべてその源を一つにしているとしか考えられない。

“Songs of Innocence and Experience” にみられる用語上及び韻律上の諸技巧は、その vision の豊富さとともに、論理を超越して空想と直観に溢れる子供の世界のように、単純さ、明快さ、幼稚さ、どぎつき、音楽性、絵画性等々を、その著しい特色としているが、一方、それによって表現されるべき作品の主題は、前章に述べたごとく、存在にたいする認識と、その認識の統一的把握という純粋に形而上的な問題なのである。大体詩における抒情詩という形式が、このような形而上の永続的な命題を表現するのに適した形式である筈がない。ましてやそれを支える手法上の諸技巧が、論理を越えた強烈な空想力と直観力から奔り出る種類のものであるとするならば、その克服するべき困難さは、想像するに十分余りある。Blake が “Songs of Innocence and Experience” を書いていたとき、その実人生のうえに至福と苦悩が交錯し、詩作の系譜のうえに lyric と prophetic が相剋し、そして作品そのもののなかに二律背反的な「如何に生くべきか」の問題が渦巻いていたという事実は、“Songs of Innocence and Experience” という作品そのものの主題の撰択に反映して、存在の二元的対立という認識の提示となって照応したが、ここに再び、それは 作品の主題そのものと、それを支える表現形式との二元的対立という形をとって照応したのである。Blake はこの対立を如何に克服したか。解答は、Blake の独得な allegory の使用に見出すことができるようである。

友人 Thomas Butts に宛てた手紙のなかにみられる “Allegory addressed to the Intellectual powers, while it is altogether hidden from the Corporeal Understanding, is My Definition of the Most Sublime Poetry.” という言葉は、Blake が下した最高の詩の定義として、しばしば引用される言葉である。C. M. Bowra は ‘Intellectual powers’ という言葉を ‘imaginative spirit’ と置きかえ、‘Corporeal Understanding’ という言葉を ‘sense-perception’ と置きかえて理解しているが、確かに Blake は、“Songs of Innocence and Experience” の一つ一つの詩を書くに当たって、すべてそれらを、直接五官には捉えることができなくても、創造的な空想力には必ず捉えるえとのできる allegory として仕立てあげたのである。その証拠の一つは、作品を特徴づける symbol の多用のなかにみることができ。詩に歌われる素材そのものは、ばら、日まわり、獅子、仔羊、かぶと虫、蟻、少年少女等すべて Blake が、日ごろ見たり聞いたり心から愛したりしていたものばかりなのだが、ばら一つをとってみても、

O Rose, thou art sick!
The invisible worm,
That flies in the night,
In the howling storm,

Has found out thy bed
Of crimson joy;
And his dark secret love
Does thy life destroy.

のごとく、すべてそれが、何か象徴的な意味を附与されずに現われるということは絶対はない。作品のなかに、象徴的な意味を担って現われる人間や自然や動植物たちは、数々の美しい絵と一緒に、作品の真の主題を透視させてくれる心の窓の役割りを果している。しかもここに忘れられてならないことは、これらの詩が、複雑な観念を数語でもって象徴的に表現しているという事実を除外しても、尚且つ、一箇の抒情詩として、読むものに生き生きとした vision を焼きつけてくるという事実である。これは詩人が、そこに詩の素材を捉えた、Blake を取り囲んだあの自然と環境そのもののなかに、すでに一つの二重性が秘められていたからに外ならないのではないか。C. Raine の言葉を借りれば、「みずから英国の予言者をもって任じた人間、時の兆しを判読することをもって、英国の想像の歴史における自分の特殊な任務とした人間にとって、芸術家と工人、都会と田園、歴史的には、18世紀の牧歌的な英国と19世紀の産業化された英国—これらのものの中に身をおいだ Blake よりもめぐまれた境遇を見出し得ようか。……「無垢と経験の歌」に見られる Blake の牧歌的な世界は、彼が細部に至るまで現実に見、知り、愛した自然界と、金色の幻想的な遠い追憶のなかに輝く失われた楽園と、この二つの世界がもつ二重の激しさをそなえている。……善と悪、無垢と経験など、二つの対立物の 和解 という Blake の vision の多くは、タイムズ河南岸のケント州の榆の並木の下、干草畑と刈入れ人たちの世界と対置された、都会の汚穢と苦惱についての、彼自身の子供のころの記憶から生れたものらしい。」

神秘思想

宇宙の全存在の根底に、融和し難い二元的対立が横たわっているという Blake の認識は、“Songs of Innocence and Experience” という作品の主要なテーマの一つとなったが、この形而上的な認識論の源泉を、Blake が共鳴していた既成の思想体系のなかに探ってみるということは、さして困難な仕事でもない。すなわち、一方は、人間は生れながらに自由平等であるとする、18世紀啓蒙思想に端を発するフランスの革命思想であり、もう一方は、Blake の思想の形成に最も大きな影響を与えたとされている Swedenborg の宗教思想である。この二

つの思想体系は、決して相交わることのない二本の平行線のようなもので、“Songs of Innocence and Experience” が制作されるころまでは、Blake はそのどちらにも強い共感を示していたから、そのころの Blake は、あらゆるものに対する見解のなかで、かなり極端な矛盾と混乱を露呈している。政治的な面への Blake の見解を例にとれば、1780年の暴動に自ら身を投じて、Newgate の監獄を焼いて囚人を解放したり、あるいは Godwin, Paine, Price 等の集まる会合の会員となって、革命運動への深い理解を示したりしながら、一方においては、“The government is a necessary outcome of the rule of Reason.” といって、政治そのものを束縛と不正の根源と考えるような anarchism への激しい傾斜を示したりする。もう一つ、宗教的な面への Blake の見解を、作品そのもののなかに捉えてみると、“Holy Thursday” や “A Little Boy Lost” にみられるごとく牧師と教会とは、野蠻と腐敗の根源として描かれ、一方、“Divine Image” の ‘Mercy’ と ‘Pity’ と ‘Love’ と ‘Peace’ とは、全篇を貫く救いの象徴にまで高められている。

“Songs of Innocence and Experience” を書くころまで Blake が共鳴を示していた二つの思想体系は、明らかに、この作品の主題たる詩人の形而上的な認識を引き起す基因となったが、それでは、Blake はその認識の統一的把握を如何なる思想に求めたか。また、思想そのものは遂に予言書のなかでしか表明されなかったにせよ、“Songs of Innocence and Experience” という作品のなかで、その思想への方向は如何に暗示されたか。まず、Blake がその予言書のなかで到達するに至った独自の神秘思想といわれるものを理解するためには、予言書の時代に彼が示した倫理的な面への見解を捉えるのが、一番手取り早いようである。晩年 Blake が Crabb Robinson に与えた言葉のなかに、“What are called vices in the natural world are the highest sublimities in the spiritual world.” あるいは ‘I do not consider either the just or the wicked to be in a supreme state; but to be every one of them states of the sleep which the soul may fall into in it's deadly dreams of good and evil, when it leaves paradise following the serpent.’ という言葉がある。まえの言葉にある ‘natural world’ と ‘spiritual world’ とは、それぞれ sense-perception によって知覚される世界、imagination によって把握される世界と置きかえることができる。そしてあとの言葉から判断すると、‘natural world’ とは ‘soul’ の眠っている状態であり、‘spiritual world’ とは ‘Eden’ と同じものであるらしい。つまり、‘good’ と ‘evil’ とは ‘soul’ の眠っている五官の世界の夢にしか過ぎない、空想力によって達せられる楽園のなかでは、善と悪との対立関係は存在しない、ということになるようである。‘Reason’ を ‘Strongest

Poison' とか 'The Spectre' とか呼んで、最大の 'sin' と規定する考え方や、'There is no use in education. I hold it to be wrong. It is the great sin.' というような教育否定の考え方は、すべてここから導き出されるものと思われる。すなわち Blake の倫理観に従えば、五官の世界の、理性による、善悪の判断は拒否され、空想力による自由の楽園に入ることが要求されるというわけである。

Blake の倫理の面における二元的対立の和解の仕方は、全存在の二律背反性という Blake の認識全般にまたがる統一的把握の仕方と揆を一にしている。Blake の二者対立の和解の思想に関して、W. Raleigh は次のように解説している。'In the real, eternal, or imaginative world, the warring powers that divide the empire of the soul of man are reconciled and united. Heaven and Hell are not true opposite; they are the dwelling places of those divorced powers of the soul whose greatest glory and strength shall be found in their ultimate union.' このように、あらゆる二律背反が、'The real, eternal, or imaginative world' のなかで統一されるとまでは分っても、その世界はどんな世界か、その世界はどこにあるのか、そこには如何にして達せられるのか、という種類の疑問は依然として残っている。Blake は

He's a Blockhead who wants a proof of what he can't Perceive;

And he's a fool who tries to make such a Blockhead believe.

といって reasoning process と proof を拒否してしまう。だからその全貌を知ることは誰にもできない。ある者は、Plato の思想との一致を説き、ある者は、東洋的仏教思想のなかにその類似性を認める。しかしそれは、依然 Blake 独自の思想として、不可解なままに残されている。

Blake が "Songs of Innocence and Experience" という作品を書いたとき、この独自の神秘思想を未だ確立するまでには至らなかったにしても、その方向と萌芽だけは見せていた筈だとは、十分に考えられるところである。従来この種の考察には殆んど手がつけられていなかったが、近年、Blake の予言書の研究が進むにつれて、次第にその問題も、かなり明瞭な形をとるまでに至った。J. Wicksteed は "Infant Joy" や "The Blossom" や "On Another's Sorrow" の挿絵にみられる一貫したモチーフを捉えて、それが 'Generation' と 'Regeneration' の繰返ししを意味するものであり、プラトンの霊魂不滅説に通ずるものであることを指摘した。そして従来抒情詩として最大の傑作と目されてきたあの "Tiger" の主題が、この思想を transfigure したものであると結論するに至った。また一方、C. Raine は

"Little Girl Lost" と "Little Girl Found" のなかの一つ一つの言葉が、1790年ごろ出た Taylor の "The mysteries of Eleusis and Dionysus" の解説にある言葉と見事に照応している事実を見出して、これらの詩が、Eleusis の密儀に表わされる霊魂不滅の物語の transfigure されたものであることを立証した。従来不可解とされてきた Blake の神秘思想の源流が、プラトンのなものとモーゼのなものを組み合わせた新プラトン派、ないしは Christian Cabbalism, Gnosticism あたりにあるということは、概ね疑問の余地がないようであるが、Blake は、"Songs of Innocence and Experience" という作品のなかで、それらの思想への指向を、抒情詩の形に transfigure してみせたわけである。そして、この思想が詩人のなかで明確な形に成長してきたとき、Blake は自分の資質から奔り出るあの抒情詩という形を捨てて、二度とそこへは戻ろうとしなかったのである。

浪漫派的特質

"Songs of Innocence and Experience" を書いていた時期の Blake には、実人生のうえでも、詩作の系譜のうえでも、あらゆる意味で二律背反的なのが、渦を巻いて争っていた。従って、二律背反とその統一とは、この作品の主題と技巧を貫く著しい特質となって現われたが、いいかえれば、その二者対立の激しさが、この作品に比類のない緊張感を与えたといえるのかも知れない。一方、この二者対立及びその弁証法的統一の指向のなかに、作品が生れるという図式は、ただ単に Blake のなかにみられるだけではなくて、浪漫派の詩人たちすべてに共通してみられる現象のようである。前期浪漫派にみられる、革命思想と観念論哲学の混こ、後期浪漫派にみられる、抒情的なものとするものとの相剋、これらは、イギリス浪漫派運動の根底に横たわる二律背反の一つの現われにすぎないと考えることもできる。同じようにして、浪漫派文学の特色としていつも数えられる、自然讚美、中世異国趣味、耽美的傾向等々は、その二律背反からの昇化ないしは逃避による統一の地点と考えてもよい。このように、"Songs of Innocence and Experience" に現われた二元的対立とその統合というモチーフを、浪漫派運動一般に共通するモチーフの一つの表現として捉えるとき、その基因は、当然浪漫派運動そのものの、時代的ないし社会的背景のなかに求められなければならない。

唯物史観によれば、如何なる文学上の変動も、社会という有機体の上部構造が示す現象の一つに外ならないと規定されている。生産諸力の状態が、経済構造を規定し、経済構造が、その社会のあらゆる人間関係を規定し、そして人間関係の総体が、精神文化の根底を規定するのである。18世紀の中葉に始まったイギリスの産業革

命は、古典的なアンシャン・レジームの世界を破壊して、決して一致することのない二つの階級を含む、近代資本主義の社会を生み出した。この時期のイギリス社会の苦悩と変動の激しさは、革命前夜を思わせる暴動の頻発から、ナポレオン戦争と神聖同盟を通して、栄光のヴィクトリア朝へとという歴史のなかに、刻明に記録されている。イギリス浪漫派という文学運動が、こうした社会全般にわたる苦悩と変動から、孤立して存在することはありえない。浪漫派文学の特質を形作っている二律背反とその統合というモチーフは、当時のイギリス社会全体を貫いたあの二者対立、明確な形をとって現われた階級の対立と、栄光のヴィクトリア朝というその一応の安定点に至るまでの道程との、その文学への照応したものに外ならないと断定しないわけにはいかない。

Blake が “Songs of Innocence and Experience” を執筆していた 1787 年から 1794 年にかけてのイギリスは、ちょうど、アメリカ植民地の独立から、ナポレオン戦争に至るまでの時期に相当していて、古典的な社会のユニティーは崩壊し、新しい社会は生みの苦しみのさなかにあった。そしてその新しい社会の将来は、全く見通しも立たない混とんの呻きのなかにあった。C. Raine の言葉を借りれば、「それは英国の国力がなお発展の途上にあつて、機械力の恐るべも増大がみられ、その癌腫が 19 世紀の進むにつれて、巨大なアルビョンの心身に、死病となつてとりつこうとしていたところであつた。」二律背反は、あらゆる社会現象のなかにその相貌を現わし、ひとびとは、二者撰択のまえに直面してとまどっていた。

“Songs of Innocence and Experience” という作品を貫く、二律背反とその神秘思想への統合というモチーフの基因は、明瞭に、この社会的現象のなかに根を下ろしているのである。再び C. Raine の言葉を借りれば、「Blake は、幼少時代から都会と田園と二つの世界を知っていた — 緑の野の無垢の世界と産業革命の経験の

世界、牧歌的な天国と『暗い悪魔の工場』の地獄とを。この双方を考察の対象としたところに Blake の全思想の特色があるのである。」

Blake はあらゆる Romantic Poets のうちで、この社会的苦悩が、その作品世界の内面を貫いた最初の詩人である。しかし、その文学活動が、すべてに先駆けていたという事実は、同時に、作品世界の挫折の早さをも意味した。“Songs of Innocence and Experience” のなかでは、二律背反の統一は、わずかにその指向を暗示しているにすぎない。その統一地点となった Blake 独自の神秘思想は、Blake の天性から奔り出る、あの明確な vision と素直な melody のなかに形作られる巨大な抒情詩の殿堂にまで、発展すべきものであった。浪漫派の中核をなす詩人たちは、すべてそれぞれの統一地点に立って、あの華れいな作品の世界を繰り上げてみせているのではないか。純粋に文学的見地よりすれば、やはり Blake は、浪漫派運動を貫く一つの特徴が、作品世界に展開されるその成熟の度合において、未成熟であったと断定されるべき詩人でしかない。Blake の未成熟度が、作品を書いた社会的環境そのものの未成熟さに根ざしていることには、異論の余地がないとしても、抒情詩の系譜が、“Songs of Innocence and Experience” をもって終りを告げ、抽象と超絶のなかにすべてを託す予言書、神話、箴言文学の彼方へ逃避されてしまったという事実は、惜しいと思わないものはまずあるまい。1801 年の手紙にみられる ‘My abstract folly hurries me often away while I am at work, carrying me over mountains and valleys, which are not real, into a land of abstraction where spectre of the dead wander ………Who shall deliver me from this spirit of abstraction?’ という一節、これは詩人自身の切実な嘆きではなかったか。

参 考 文 献

- Oxford Standard Authors: Poetical Works of W. Blake, 1956, Oxford.
 Cambridge History of English Literature: Blake, 1932,
 C. M. Bowra: The Romantic Imagination, 1949, Oxford.
 J. Wicksteed: Blake's Innocence and Experience, 1928, New York.
 S. A. Brook: Studies in Poetry, 1920, London.
 W. Raleigh: Introduction to Lyrical Poetry of Blake, 1906, Oxford.
 C. Raine: The Little Girl lost and Found, 1957 London.
 英文学ハンドブック26号: ブレイク, 1956, 研究社
 英米文学評伝叢書31号: ブレイク, 1934, 研究社

(昭和34年8月28日受理)